

く「然れば、浅井郡に諸の比丘有り。六巻抄を読まむとす。故に我れ其の知識に入らむ」といふ。浅井郡は、同じき国の内に有る郡なり。六巻抄は是れ律の名なり。此の僧念ひ怪びて、彌猴の語に随ひて、往きて檀曰の山階寺の満預大法師に告ぐ。猴の詭へたる語を陳ぶ。其の檀曰の師、受けずして言はく「此れ猴の語なり。我れは信はず。受けず。聴かず」といふ。すなはち抄を読まむとして、設をする頃に、堂童子優婆塞、忿々しく走り来りて言はく「小き白き猴堂の上に居る」といふ。纔見れば九間の大なる堂、仆るること微き塵の如く、みなことごとく折れ摧く。仏の像みな破れ、僧坊みな仆る。見れば誠に告げたるが如し。既にことごとく破れ損はる。檀曰と僧と更に七間の堂を作り、彼の陀我大神の名を顕せる猴の語を信ひて、同じく知識に入れて、願ふ所の六巻抄を読み、并に大神の願ふ所を成す。然うして後に、願了るに至るに、かつて障の難無し。夫れ善き道を修ふことを妨げて、儼彌猴と成る報を得。故に僧を勧へ催すなり。なほ妨ぐるべからず。悪しき報を得るが故に。往昔過去に、羅睺羅國王作りし時に、一の独覺を制めて、食を乞はしめず、境に入ることを聴さず、七日頃飢多さしめき。此の罪の報に依りて、羅睺羅六年生れず、母の胎の中に在りといふは、其れ斯れを謂ふなり。

大海に漂流れ敬ひて釈迦仏の名を称へて命を全くする  
こと得る縁 第二十五

長男紀田馬養は、紀伊国安部郡吉備郷の人なり。小男中臣連祖父磨は、同じき国海部郡浜中郷の人なり。紀万侶朝臣、同じき国日高郡の潮に居住み、網を結びて魚を捕る。馬養と祖父磨と二人傭賃ひて年の価を受け、万侶朝臣

三 上文に「封六戸」とあった。  
四 底本訓釈「典へ可止礼留」。  
五 どのようにして。  
六 滋賀県東浅井郡、伊香郡あたり。  
七 道宣の四分律刪繁補闕行事鈔。六巻に調卷されるばあひがあった。  
八 「檀越」に同じ。施主。  
九 興福寺。  
一〇 未詳。本説話以外に所伝をみない。「大法師」は下巻十七縁。  
一一 「纔」は、一すると同時に、の意。  
一二 ここにみえる「九間」、下文にみえる「七間」は、母屋の桁行・棟の方向の柱間（はしら）の数がそれぞれ九、七であることを示す。きわめて大規模な堂舎がたち並んでいたらしい。

宝亀四年（七三三）三月、近江国に大風が吹き荒れた（統紀）。本説話にみえる堂舎の一瞬にしての崩壊は、おそらくはその時の大風によるものであろう。本説話は、堂舎の崩壊を神のしわざとして説明しようとするもの。  
三 原文「信」彼陀我大神顯名猴之語」。

四 玄心は一切経音義・二十一に「又言覆障、六年在胎、為胎所覆也、又七年在母腹中、一由往業、二由現在、往業者、昔曾作國王、制斷獨覺、不聽入境界、獨覺在深山、七日不得乞食、因墮地獄、余報猶七年、在母腹中」とみえる（政証所引の潮音の指摘）。摩訶僧祇律・十七はじめ諸書にみえるが、措辞の面からいえば一切経音義がもっとも類似する。羅睺羅は釈迦の子。獨覺は山林修行者。

第二十五縁 今昔物語集・十二ノ十四に書承。五 成人の男子。戸令にみえる「丁」と同意か、とする政証の説によるならば、二十一歳以上の男子（戸令）。七十七歳以降は二十二歳以上とされた（類聚三代格・十七）。

六 未詳。本説話以外に所伝をみない。  
七 和歌山県有田郡吉備町あたり。  
八 戸令によれば四歳以上十六歳以下（七五七歳以降は十七歳以下）の男。  
九 未詳。本説話以外に所伝をみない。  
一〇 和歌山県海部郡下津町あたり。  
一一 未詳。本説話以外に所伝をみない。  
一二 和歌山県日高郡、御坊市あたり。「潮」は日高川河口あたりであらうか。

に従ひて昼と夜とを論はず共に駆せ使はれて網を引きて魚を捕る。白壁天皇の世の宝龜六年乙卯の夏六月の十六日に、天下に強き風吹き、暴き雨降る。潮に大水漲へて雑の木流出づ。万侶朝臣、驅使に遣りて、流木を取らしむ。長男と小男と二人、木を取りて桴を編み、同じき桴に乗り、拒み逆ひて往く。水はなほ荒く急し。繩絶え棧解けて潮を過ぎ海に入る。二人おのの木のを得て乗りて海に漂流する。二人知らずして、ただ「南無無量災難令解脱釈迦牟尼仏」と称誦へ、哭き叫びて息まず。其の小男は、五日を逐て其の日の夕の時に、淡路国因南郡の田野浦の塩焼く人の住む処に僅に依り泊つ。長男馬養は、後に六日の寅卯時に、同じき処に依り泊つ。当の土の人等、見て来由を問ひ、状を知りて慰ひて養ひ、当の国司に申す。国司聞き見て、悲び賑みて糧を給ふ。小男歎きて曰はく「生を殺す人に従ひて、苦を受くること量無し。我れまた還り来らば、彼れまた驅せ使ひてなほ事に生を殺す業を止めずあらむ」といひて、淡路国の国分寺に留り、其の寺の僧に従ふ。長男は二月を逐て、本の土に帰来る。妻子見て、面と目と測青になりて驚き怪びて言はく「海に入りて溺れて死に、七々日を逐て、齋食を爲し、恩を報ゆること既に畢る。思はずより外に、何すれぞ生きて還来る。もしは是れ夢か、もしは是れ魂か」といふ。馬養

妻子に向ひて、具に先の事を陳ぶ。是に妻子聞きて、相悲び相喜ぶ。馬養心を發し世を厭ひ、山に入り法を修ふ。見聞者、奇異びずといふこと無し。海の中に難多しといへども、命を全くして身を存つ。寔に釈迦如来の威徳にして、海の中に測ふ人の深き信なり。現報なほ是くの如し。いはむや、後生の報をや。

強ひて理にあらずして債を徴りて多く倍して取りて  
現に悪しき死の報を得る縁 第二十六

田中真人広虫女は、讃岐国美貴郡の大領外従六位上小屋県主宮手の妻なり。八の子を生み、富みて貴く宝多し。馬と牛と奴と婢と稲と錢と田と畠と等有り。天年道の心無く、慳貪にして給与ふること無し。酒に多の水を加へ、汚りて多の直を取る。貸す日には小き升をもちて与へ、償す日には大なる升をもちて受く。出挙の時には小き斤を用、償し収むる時には大なる斤を以ちてす。息利を強ひて徴ること、太甚しく理にあらず。或るは十倍に徴り、或るは百倍に徴る。債ふ人は耳を洩くし、心を甘しとせず。多の人方愁へて家

一七七五年。  
二この時の暴風雨に關しては、他に記録は伝えられていない。続紀によれば、六月は旱天のため折雨。八月九日には暴風雨により伊勢、尾張、美濃に被害。十一月には暴風雨により日向、薩摩に被害。  
三流れに逆らつて航行する。  
四出发点であつた港まで激流におし返され、さらに海まで流された。  
五無量の災難から解脱させてくれる釈迦牟尼仏に、南無いたします。諸注は、「南無、無量の災難を解脱せしめよ、釈迦牟尼仏」と称えた、と解する。しかし、いずれのばあいでも、「無知なのでこのように称えた」とする説話展開には無理がある。漂流する二人が「波」、あるいは「浪」「吹か」(波が立つ、の意。万葉集二十・四三には、波よ立つな、の意で「波な吹きそね」とみえる)などと呼ばれるのが「南無」(釈迦と称えたことになった、という説話展開が本来のものではないだろうか。  
六兵庫津名郡、洲本市。田野浦は未詳。  
七六日後。  
八寅は午前三時から五時のころ。「卯」は午前五時から七時のころ。「寅卯時」は午前五時ごろか。詳細な日時が記述されるのは、この二人の漂流が文書にされ、そこに詳細な記事が記載されてきたのであらう。

九原文「悲賑給糧」。官による食糧の施与は、賑給、賑恤、などと称された。  
一〇發生は、十惡のひとつ。  
一一兵庫三原郡三原町八木突原国分に所在。  
一二下巻四縁。  
一三下巻三十八縁。

一四上巻二十四縁。  
一五追善のおこない。上巻三十三縁。  
一六原文「不思之外」。政事要略所引高橋氏文に「不思保佐佐流(外爾)」とみえる。伴信友は高橋氏文について「この不字無用なり」としている。下巻四十二縁。  
一七上文によれば、六月十六日に流され、六日後に漂流。「運」二月二日を起点としての叙述か不明ではあるが、妻子と再会した時は、後代に「彼岸」と称された時期にあたるか。『日本暦日原典』によればこの年の秋分は八月十九日。「若是魂矣」とされるのは、この時期に死者の靈魂が帰還する、とされていたことを示すか。下巻三十二縁。  
一八このことを記した文書にかかわるか。  
一九来世での報。「後生」と「現報」とを對比させる例に、下巻三十縁がある。

第二十六縁 悪業についての現報説話。  
一未詳。本説話以外に所伝をみない。  
二香川県木田郡あたり。  
三未詳。本説話以外に所伝をみない。

一七七六年。讃岐国では、七七年六月に疫病、七七年三月に飢饉、七七年二月に飢饉、七七年二月に飢饉(続紀)。